

---

# 転生 ヴェスペリア

サレナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生 ヴェスペリア

### 【ΖΖコード】

Ζ4653R

### 【作者名】

サレナ

### 【あらすじ】

神に間違つて殺されてヴェスペリアの世界に……

## 始まりかな？（前書き）

初めての投稿です。素人が作る小説なので、読みにくいと思いますが、頑張っていきたいと思います。

始まりかな？

周り一面、白い空間」には何処なんだろ?...と思つてゐるが、  
「本当にすいませんしたああ～～」

いきなり変なオヤジが土下座してきた

「ちよつと変なオヤジはないでしょ」

ん?声にだしてたか?「違うよ心を読んだ」何?心を読んだだと  
変なオヤジの癖にいや変態の方がいいか  
「ちょ変態つて、儂は神じや」

神だと?頭大丈夫か?まあいや、その神が何の用だ

「実は……お主は本来死ぬはずじゃなかつたんじや」

「これつてまさか転生フラグじゃね

「そうか、間違つて死んだんだ。それなら転生させてくれない?」

「良いぞ。」

「それと何か能力くれない?」

「良いぞ、でも転生する場所はテイルズオブヴェスペリアしか駄目  
じゃぞ」

マジか俺てきには、ダカーポとかの方が良かつたんだけど…でもテ  
イルズの中で一番好きだからいいか

「それじゃあ能力は魔術はすべて使える様に威力は最強にしておいで、剣術も最強にしてあと治癒術も使える様に、始祖の隸長と会話出来る様にフレンやユーリの幼馴染みつて設定で顔は…何でもいいこれぐらいでいいや」

「……分かった。では送るぞ、」

そして光に包まれて消えた。

## 第0話（前書き）

始まりって確かにこんな感じだった様な……

## 第0話

この世界、テルカ・リュミレース

大地と海が何処まで続くのか、知る人はいない

なぜなら……

世界にうごめく魔物たちに比べ、人はあまりにも弱い  
我々の住む街を守る結界、我々は己を守るためにその中で生きながら  
えている

それを成す、核となる魔導器

世界に満ちた根源たる力、工アルを使い、  
魔導器は、

火、水、光、繁栄に必要な、

ありとあらゆるもの、今まで我々に与え続けてきた

やがて、いつの日か、

結界の向こうに、

凶暴な魔物が生息する事も我々は忘れてしまうのだろう

繁栄と成長を続ける世界……

すべての人々のための平和、魔導器の恩恵により更なる発展を遂げ  
ていくだろう

平和の礎である帝都ザーフィアスより願つ『世界が穏やかであるよ  
うに』

## 第0話（後書き）

ヒロインを誰にしおりが悩んでいます。  
誰がいいですか？意見を下さい。

主人公設定です。一応……（前書き）

主人公は転生する前は大のテイルズ好きです。

( ) ……心の声

## 主人公設定です。一応……

名前……レイ・タチバナ（仮）（男）

年齢……19歳

容姿……童顔で女顔、初めて見る人は女性に間違つことも、声も若干高い。髪はユーリ位ある。金髪

身長……163cm

性格……仲間想い、若干鈍感、お化けが苦手、困っている人がいたら、ほっとけない、キレたら恐ろしい。

実力……ドンと闘い勝つた事がある。

闘い方……主に双剣を使うが他のを使つても十分強い。

……ユーリとフレンが騎士団に入る時に旅に出た。本人は身長が高くないことと、顔のことを気にしていて、が、それを利用してユーリ達をよくからかう。声真似が得意。

最近は自分が転生してテイルズの世界に来たことを忘れている。

主人公設定です。一応……（後書き）

これが今回の主人公です。後でつけたすかも……

## トライアル（初期化）

トライアル端から始まります。

ほとんどの見えてないのではだと思っています。

## 『トイドン』篇

レイ「トイドン篇に来たものの何するかな？」

カンカンカンカン

レイ「ん？警報？」

レイ「『トイドン』と魔物の群れがこっちに向かつてきた

レイ「マジかよ！ あれユーリちゃん何やつてんだ？」  
と思っていると、ユーリという青年は人形を持ち門が閉まるギリギ  
リのところで間に合つた様だ。

レイ「よし、ユーリのところに行つてみよう。  
と言つとユーリの方へ向かつて行つた。

レイ「お疲れ様。ユーリ」

ユーリ「あ…お前…レイ…今までどこ行つてたんだよ！」

レイ「いや～～旅に出るつて、手紙書いたじゃん。それより、ユー  
リこそ女性連れて何してんだよ。」  
(まあ知つているけどね)

ユーリ「手紙つてお前『旅に出る』しか書いてなかつたぞ、しかも  
いきなり居なくなるし」

ユーリは呆れた様に言つた。????「私はステリーゼつて言  
います。エスティルとお呼びください。」

とユーリの隣に居た女性もといエスティルはレイに向かつて言つた。

レイ「僕はレイよろしくなー！」

と挨拶を交した。

コーリ「俺は下町の魔導器を取り返しに、エスティルはフレンに会つ  
があるんだと/or」

レイ「フレンに? そう言えば、あいつに全く会つてないな」  
コーリ達と話をしていると騎士団の人気がこちらへ來た  
「そこ」の一人ちょっと話がある」と言つた後すぐにギルドの奴らが  
騒ぎ出した。そして話かけて来た騎士もそちらに向かつて行つた。  
(騒いでいるヤツ見たことあるよ? うな……まあいいか)

レイ」で、この後何処に行くの?」  
とユーリ達に聞いたら

エステル「花の街ハルルに行こうと思いまして。」

「……………」

# 「弾むわよ」

人組の男女が話かけてきた、女性はチャリンとお金を見せた。ヨリはそっぽをむいた、すると男性が「社長に対して失礼だぞ。返事はどうした」と怒りだした。

ヨーリ「名乗りもせずに金で釣るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になつたわ」

と反対みたいに言つた。すると異性が怒りそうになつたら、女性が止めた。

？？？「予想通り面白い子ね。私は、ギルド『幸福の市場』のカウフ

マンよ、商売から流通までを仕切りせりせりしてりてるわ

ユーリ「ふ〜ん、ギルドね……」

「あると、アーティスト、アーティスト、アーティスト、アーティスト」と地響きが鳴った。

カウフ「私、今、困つてゐるよ。この地響きの元凶のせいだ

ユーリ「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか？」

カウフ「ええ、平原の主のね」

エステル「平原の主？」

カウフ「魔物の大群の親玉よ」

ユーリ「あの群れの親玉つて……世の中すげえのがいるな」

エステル「どこか別の道から、平原を越えられませんか？先を急いでるんです」

カウフ「さあ？平原の主が去るのを、待つしかないんじゃない？」

ユーリ「焦つても仕方ねえってわけだ」

エステル「待つてなんかいられません。わたし、他の人にも聞いてきます」

とエステルは去つて行つた。すると一回ユーリの方を見てラピード

がエステルを追い掛けた。

ユーリ「流通まで取り仕切つてゐるのに別の道、ほんとに知らないの？」

カウフ「主さえ去れば、あなたを雇つて強行突破つて作戦があるけど、協力する気は……なさそうね」

ユーリがニヤと笑い

ユーリ「護衛がほしいなら、コイツに……つてレイの野郎もう居ないし……」

|||||

レイ視点

レイ「危なかつたあ～まさかあそこにカウフマンがいるとは……（汗）」

（確かに次はクオイの森だったよな、入り口の前で待つてよ）

|||||

レイ「あ～～い、別の道見付かった？」

ユーリ「お前、今まで何処に行つてたんだよー。」

レイ「何かちょっと嫌な予感がして逃げてた。まさか、ユーリ僕を売ろうなんてしてないよねえ」

ゴーリー「ギャクツ……………そつそらなことねえよ、ほやく行くが、

エスティル、レイ（売り物としたん（だ）（ですね）（

）

## スキット（漫遊）

スキット風についてみました。

嘘つかな！

「ヨーリー、しきかし、久しぶりだな！お前旅に出てから一回も帰ってきてなかつたもんな。」

レイ「まあね、一回は帰ひとつと思つてこたが、デイドン號でばつたつと会つたからね。」

エスティル「ユーリとレイはどんな関係なんですか？」

レイー もちろん、  
恋人関係だよね、  
ユーリ？ 甘い声で

コーリー 違うだろーー（怒）

レイ一  
えつ、僕とは遊びたかったの（涙）

エス元ルーツ、エリ!!!それは酷いですよ、見損ないました。」

リリーフス元川も信しんなよ」

ヨーリー 大体レイは、男だからな」

「えっ、嘘だつたんですか？……つて男性だつたんですか

ゴーリ「やつぱり、男に見えないよな、レイつて」

レイ「…………男だもん。」

ゴーリ「…………」

関係は？

エステル「ゴーリとレイの本当の関係は何なんですか？」

ゴーリ「オレとフレンの幼馴染みなんだよ。」

レイ「やつ言えれば、ゴーリ騎士団はまだついたの？」

ゴーリ「…………辞めたんだよ。」

レイ「そつか。予想はしてたけど、（じいせ下町のためだらう）  
フレンは？」

ゴーリ「フレンは小隊長してる。」

レイ「フレンが小隊長か…………出世したね。」



また、つぶつたこと思こまへ。

## クオイの森

エステル「……」の場所にあるって、まさか、クオイの森……？」

ユーリ「（）答、よく知ってるな」

エステル「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で  
読んだことが……」

ユーリ「なるほど、それがお楽しみみてわけか」

レイ「お楽しみみて何？」

ユーリ「ちよつとな」

ユーリとレイは奥に進もうとした。

エステル「……」

エステルは呪いを気にして進もうとしなかった。

ユーリ「行かないのか？ま、オレはいいけど、フレンはどうすんね  
？」

ユーリは振り向きエステルに言った。

エステル「……わかりました。行きましょう」

エステルは覚悟を決めて奥に進んだ。

|||||

エステル「何の……音です？」  
何か変な音が聞こえた。

エステル「足元がひんやりします……。まさかー！ことが呪いー！？」

エステルは怯える様にユーリ達に聞いた。

ユーリ「どんな呪いだよ

エステル「木の下に埋められた死体から、呪いの声がじわじわと這い上がりわたしたちを道連れに……」

ユーリ「おいおー……

ユーリは呆れた様に言った。

レイ「お化けはいない、お化けはいない、お化けはいない、お化けはいない……」

レイは念佛の様に何かを言っていた。

ユーリ「おーい、レイ大丈夫か？」

レイ「お化けはいないお化けはいないお化けはいないお化けはいない、はつ……どうしたの？」ユーリ？

ユーリが声をかけたら、レイは正常に戻った。

ユーリ「……いや、何でもねえ」

ユーリは苦笑いしながら答えた。

エステル「……あれは？」

エステルは何か見つけた様でユーリ達に尋ねた。

ユーリ「これ、魔導器か。なんでこんな場所に……」

ユーリとラピードは近づいた。

レイ「少し休憩しようか」

ユーリ「そうだな」

レイはエステルが辛そうにしてるのを見てユーリに同意を求める、贊成した。

エステル「だ、大丈夫です」

エステルはこれを断つて歩きだした。そして、魔導器の前で止まつた。

エステル「……あれ、これは？」

いきなり、魔導器が光つた。

ユーリ、エステル『うわっ「きやつ』』

そして、エステルが倒れた。

レイ（……）

ユーリは慌てて、エステルに駆け寄った。

ユーリ「おい、エステル！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

エステルはラピードに枕かわりになつてもらつて、寝ている。レイは周りの警備を、ユーリは落ちてたニアの実を食べようとしていた。

ガリツ

ユーリ「にがつ」

すると、エステルが目を覚ました。

ユーリ「大丈夫か？」

エステル「うつ……少し頭が……。でも、平気です。……わたし、  
いつたい……」

ユーリ「突然倒れたんだよ。何か身に覚えないか？」

エステル「もしかしたら、エアルに酔つたのかも知れません」

ユーリ「エアルって魔導器動かす燃料みたいなもんたる？目には見えないけど、大気中にまぎれてるやつ」

エステル「はい、そのエアルです」

レイ「濃いエアルは人体に悪い影響を与えるんだよ、エステル大丈夫？」

周りの警備から帰ってきたレイが説明した。

エステル「はい、大丈夫です。」

ユーリ「ふうん、だとすると呪いの噂つてのはそのせいなのかもな」と、エステルが立ち上がった。

レイ「倒れたらばかりなんだから、もう少し休みな」

エステル「そうはいきません。早くフレンに追いつかないと」

ユーリ「また倒れて、今度は一晩中起きなかつたらどうするんだよ」

エステル「でも……そりですよ。『めんなさい』……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

エステル「フレンが危険なのにゴーリ達は心配ではないんですか？」

ゴーリ「ん？ そう見える？」

レイ「うん」

エステル「……はい」

ゴーリ「実際、心配してねえからな。あいつなら自分で何とかしちまうだろ？ し、あいつを狙ってる連中にはほんと同情するよ」

レイ「確かにね」

エステル「え？」

ゴーリ「ガキの頃から何やつてもフレンには勝てなかつたもんな。かけっこだらうが、剣だらうが、そう上、余裕かまして、こう言つんだぜ？ 大丈夫、ゴーリ？ つてさ」

エステル「うらやましいな……。わたしには、そういう人、誰もいないから」

ユーリ「こりも口ひるせこだけだわ」レイ「……よし、それそろ行  
いつか。」

|||||

ラピード「グルルルルル……」

ラピードが草むらの方を向いて威嚇していた。

ガサガサ

ユーリ「ん？」

ユーリとHスティルは音のした草むらの方を向いた。

? 「エッグベアめ、か、覚悟！」

いきなり、草むらから飛び出して来た。自分の武器を振り回しながら。

? 「うわっ、とっとっ！」

ヒュ、バシッ

ユーリは、自分の武器を左手に持ち、タイミングを計つて攻撃をした。回っていた少年は転んだ。

? 「うああああっ！あうっ！う、いたいた……」

転んだ少年にラピードが近づいた。

？「ひいいつ！ボ、ボクなんか食べても、おじしくないし、お腹壊すんだから」

ラピード「ガウッ！！」

？「ほ、ほほほんとに、たたたすけて。ぎゃあああ~~~~~！」

ユーリ「忙しいガギだな」

エステル「だいじょうぶですよ」

？「あ、あれ？魔物が女人に」

レイ「魔物が人になるわけねーだろ」

ユーリ「つたぐ。なにやつてんだか」

|||||

？「ボクはカロル・カペル！魔物を狩つて世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

ユーリ「オレは、ユーリ。それにエステルとレイ、ラピードだ」

ユーリが代表として自己紹介をした。

ユーリ「んじゃ、そうこう」と

エステル「あ、え？ちょっとユーリ、レイ！」

ユーリとレイは歩いて行った。

エステル「えと、『めんなさい』

エステルはカロルに向かって頭を下げてユーリ達を追い掛けた。

カロル「へ？…………って、わ～待つて待つて待つてー。」

カロルは急いでユーリ達の前に出た。

カロル「3人は森に入りたくてここに来たんでしょう？なら、ボクが  
…………

エステル「いえ、わたしたち、森を抜けてここまで来たんです。今  
から花の街ハルルに行きます」

カロル「へ？うそー？呪いの森を？あ、なら、エッグベア見なかつ  
た？」

レイ「いや、見なかつたと思つけど」

カロル「そつか…………なら、ボクも街に戻らうかな…………あんまり待  
たせると、絶対に怒るし…………うん、よしー！」

レイがカロルに近づき耳元で

レイ「ナンちゃんにか？」

カロルがビクッとしてレイを見た。

レイ「冗談だよ冗談、アハハハハ」

レイは爆笑していた。

レイ「アハハハハハ、そうだ、先にハルルに行つて後で合流出来たら、するから」

ユーリ達にそう言って来た道を戻つて行つた。

クオイの森（後書き）

次の投稿はいつになるか……

## ハルルの街（前書き）

主人公のしゃべり方を変えました。

僕 俺

## ハルルの街

ユーリ達と別れて魔導器のあつた所を目標して、きた道を戻つて、  
る今日この頃。しかも今は、何故か3匹のウルフに囮まれている。  
すると1匹のウルフが飛びかかってきた。

レイ「チツ、面倒だな」

腰の所にある2本の剣の内、1本を右手に持ち、ウルフの首を斬つ  
た。すぐに残りのウルフに向かって魔法を放つた。

レイ「エアスラスト」

ズシャズシャ

ウルフ達は風の刃に切り刻まれて絶命した。

|||||

魔導器の所に着くと1人の男がいた。

レイ「やつぱりいると思ったよ。」

？「……何だ、レイか」

レイ「デューグあんたは、ここで何やつてんの？まあある程度わか  
るけど」

デューグ「これだ」

デューグは魔導器の方を示した。

レイ「やつぱりな、まだそんなことやつてんの？」

デューグは世界中で暴走している魔導器を止めて回っているっぽい。

デューグ「ああ……」

デューグはそつけなく答えた、相変わらずだな。

デューグ「お前は、何故ここに？」

レイ「ん？ あつそつそつ、わつわ通つた時にちよつと氣になつてね。そして来てみたら、あんたが居たつとそんな感じ。」

デューグ「そうか…… それではな。」

デューグは去つて行つた。

確か次はハルルの結界を直すんだつけ？ もう何十年も経つてゐから忘れてきたな。

ズシン ズシン

ん？ 何か足音が聞こえる。後ろを振り返ると、それはそれは大きな

熊さん もといエックベアがいました。

レイ「俺の後ろに立つんじやねえええ～」

某穴子さんみたいな事を言つて斬りつけた。ん？ ちよつと待てよ、エックベアの爪つて確か必要だつた様な…… よし、採るか

11 of 11

爪つて案外簡単に採れるもんなのな、まあ関係ないかにでも行つてユーリ達に合流するか。

# エステル「レイ！」

あつちから來たし

ユーリー「お前、まだここにいたのか？」

レイ「いや、用はもう終わってハルルに行こうとしていた所。  
か何でお前達戻つて来てるの？」

エステル「それが、ハルルの樹の結界魔導器を治すために二アの実とエックベアの爪が必要なので……」

レイ「なるほど、…でもエステルの目的は違くなかった?」

エスティル「それは……」

レイ一 ああ、そういう事なら、ほれ、

ヨーリニアの実、エツクベアの爪を渡した。

「ユーリー、ちよ、お前にこれどうしたんだ。」

レイ「ん？ それ？ さっきエックベアに襲われそうになつたから、返

り討ちにして採つてきた。」

平然として答えた。

カロル「えつ！？狂暴なエックベアを一人で……」

ユーリ「まつ、レイだからな」

エステル「す…凄いです。」

カロルとエステルは驚き、ユーリは何故か納得していた。

レイ「そんな」とより、そんなの何に使つんだよ。」  
確かにパナシーアボトルを作るんだっけか

カロル「パナシーアボトルを作るための材料だよ」

エステル「後は、ルルリエの花びらだけですね。」

レイ「そうなのか…じゃあハルルに戻るのか？」

ユーリ「そうだな。」

ハルルに戻るために進んで出口の近くまで来た所で

? 「ユーリ・ローウェル！森に入ったのはわかっている！素直にお繩につけい！」

レイ「呼ばれているぞ、ユーリ。」

ユーリは呆れた様に

ユーリ「この声、冗談だろ。ルブランのやつ、結界の外まで追つてきやがつたのか」

カロル「え、なに？誰かに追われてんの？」

ユーリ「ん、まあ、騎士団にちょっと」

カロル「またまた、元騎士が騎士団になんて……」

カロルは冗談だと思つていたが、ユーリが無言で本当だと分かり

カロル「え、え、ええ～つ……」

驚いていた。

? 1「す、素直に出てくるのである」

? 2「い、今ならボルの勘弁してあげるのだ～」  
2人は脅えた声で言つていた。

ルブラン「噂」ときには、それでもシユヴァーン隊の騎士か！」

ルブランは真逆で叫んでいた。

カロル「……ねえ、何したの？ 器物破損？ 詐欺？ 密輸？ ドロボウ？ 人殺し？ 火付け？」

ユーリ「脱獄だけだと思つんだけだと……」

俺はユーリに近づき、エステルをチラツと見て

レイ「誘拐も…か」

ユーリ「かもな。」

俺とユーリは小さい声で話した。

ユーリ「ま、とにかく逃げるぞ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ユーリ「これでよしつと」

近くにあつた草などを使って道を塞いだ

エステル「だ、ダメですよ！ 無関係な人にも迷惑になります！」

レイ「誰も通らないと思うけど、ここ、呪いの森だし」

|||||

ハルルに着いた。すっかり空は暗くなり、夜になっていた。

エステル「あの、ルルリエの花びらを持つていませんか？」

エステルは村長らしき人に聞いていた。

「誰からそれを？確かに持っていますが……」

訳を話すと

「なるほど、そういうた理由で、ルルリエの花びらはハルルの樹に咲く三つの花の一つそれを半年間陰干しにして作る貴重な物、最後のひとつですが、樹がよみがえるのであれば、」

村長はエステルに渡した。

エステル「ありがとうございます」

カロル「これでパナシーアボトルが作れるね」

ユーリ「ようす屋に行くぞ」

|||||

ようす屋でパナシーアボトルを作つてもらい、ハルルの樹の前に街の人々が集まつている。

「おおつ、毒を浄化する薬ができましたか！？」

村長が代表として聞いてきた。

ユーリ「カロル、任せた。面倒なのは苦手でね」

ユーリは持つているパナシーアボトルをカロルに渡した。

カロル「え？ いいの？ ジャア、ボクがやるね！」

カロルは、はしゃぎながらセットしに行つた。

エステル「カロル、誰かにハルルの花を見せたかったんですね？」

レイ「多分ね、（ナンちゃんと見せたかったのか）」  
ピカーン

樹が光り浄化していく。

エステル「樹が……」

「お願いします。結界よ、ハルルの樹よ、よみがえつてください」

しかし、全てを浄化する事は出来なかつた。

「そ、そんな……」

カロル「うそ、量が足りなかつたの？ それともこの方法じゃ……」

エステル「もう一度、パナシーアボトルを！」

「それは無理です。ルルリエの花びらはもう残っていません」

エステル「そんな、そんなのって……」

レイ（おつ始まるかな）

エステルは手を胸の前で組み手を瞑つた。

エステル「……お願い」

エステルの体が光だした。  
ユーリ「エステル……」

ユーリは心配そうに見ていた。

エステル「咲いて」

するとハルルの樹の魔導器が光だし、枯れていた花達が咲き始めて  
結界が出来た。

カロル「す、すごい……」  
「こ、こんなことが……」  
「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……ありえない……でも……」

レイ「おつと、お疲れ様。」

エステルが倒れそうになつたのを、受け止めた。

エステル「はあ……はあ……あ……ありがとうございます。」

子供達が近づいてきた。

「ありがとうね！ハルルの樹を元気にしてくれて！」

お祓を言ひと云ふは、僕達はハリハリの花をみはむだ。次は村長がお祓を言つた。

...  
L

エステル「わ、わたし、今なにを……？」

ヨーリー すげえな、  
エヌテル。

カロルはユーリに近づきハイタッチをした。

レイ 僕達もやるか

パチツ

俺はエスティルとハイタッチをした。

ユーリ「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、ビックリだ  
らうな……『さまあみゅ』」

エステル「ユーリとフレンって不思議な関係ですよね。友達じゃないんです？」

レイ「ただの昔馴染みっだら」

ユーリ「だな」

ラピードが何かに気付きたユーリに近づた。ラピードの目線を見ると怪しい人達がいた。

エステル「あの人達、お城で会った……」

ユーリ「住民を巻き込むと面倒だ。見つかる前に一旦離れよう」

レイ「はあ～本当にユーリはいろんな奴に好かれているね。」

カロル「え？ なになに？ どうしたの急に！」

急いで下に降りつて行つた。

ユーリ「面倒な連中が出てきたな」

エステル「ここで待つていればフレンも戻ってくるのに」

カロル「そのフレンって誰？」

ユーリ・レイ「エステルが片想いしている帝国の騎士様だ」

カロル「ええっ！？」

エステル「ち、違います。！！」

ユーリ・レイ「あれ？違つのか？ああ、もうドキてるつてことか」

エステル「もう、そんなんじゃありません」

少しやりすぎたかな？エステルは怒っていた。

ユーリ「ま、なんにせよ、街から離れた方がいいな」

エステル「そうですね。街の皆さんに迷惑をかけたくありません」

エステルは怒るのをやめて今度は落ち込んだ。

レイ「フレンの行き先がわかるなら追い掛けたり？」

俺の意見にユーリが反応して

ユーリ「確か、東に向かつたって言つてたよな」

エステル「はい」

ユーリ「……アスピオつてのがどこにあるか知らねえけど、とりあえず、今は急いでここを出た方がいいみたいだな」

出て行こうとしたら、村長に呼び止められた

「待つてくだされ、花のお礼がしたいので、我が家へおいでください」

エステル「そんなお礼だなんて……」

「そんな遠慮なさいず」。私は先に家に戻つております」

村長は一礼をしていなくなつた。

エステル「あ、ちょっと」

カロル「どうするつお礼だつて」

ユーリ「このまま、無視していくわけにやいかんだろ」

エステル「でも、わたし夢中で、何したかも、よくわからなこのこ」

レイ「断るなら断るにしろ、行かないと断れないよ。」

エステル「分かりました。」

::::::::::::::::::

「おお、おお、よくぞ参られました。たゞ、『やつれつと……』

エステル「ありがとうございます。でも、私達、あまりやつれつ出來ないので……」

「まだ騎士様も戻られていないのに街を離れるのですか?」

ユーリ「やつれつと事情が変わつてね」

「何かお急ぎの用とか」

ユーリ「まあ、そんなとこだ」

「私でお力になれる」とならなんなりと……」

エステル「そのお気持ちだけ、いただいておきます  
「やうですか……でしたら、わざかばかりですが、どうぞお受け取  
りください」

村長はゴーリーにお金を渡そうとした。

ゴーリー「オレ、何もやつてないぜ」

「しかし、お連れせんにお世話になりましたので……」

カロル「じゃ、じゃあ……」

それを聞いたカロルが貰おうとした。

エステル「いえ、それは受け取れません」

カロル「あ……ええと、じゃあボクもいらない、かな……と」

「いや、しかし、それでは気持ちの收まりがつません。」

レイ「じゃあ、今度遊びにきた時に、特等席で花見つてのは?」

俺は、皆に確認を取つた。

ゴーリー「だな。」

エステル「あ、それいいですね。とても楽しみです。」

カロル「うん。賛成!」

レイ「決定だね。」

「……分かりました。その時は腕によりをかけて、おもてなしをさせて、いただかます。」

ユーリ「あ、ひとついいか？アスピオって街に聞き覚えない？」

ユーリは気になっていた事を聞いた。

「……アスピオ？ああ、日陰の街が、確かにそんな名だったような…」

ユーリ「日陰の街？」

レイ「洞窟の中に街があるからだ」

ユーリ「知つてんのか？」

レイ「まあ行つたことが、あるからね。」

ユーリ「お前、何でそれを言わないんだよー。」

レイ「いや、聞かれてなかつたし。」

ユーリ「はあ～まあいいや、でどつちの方角だ？」

レイ「東だね」

エステル「フレンが行つた方角と同じ」

ユーリは村長さんにお礼を言つていた後に

ユーリ「待つてろよ、モルディオのやうつ」

ハルルの街を後にして、アスピオに向かつた。

## ハルルの街（後書き）

約2週間、間隔で投稿したいと思っています。

## アスピオ（前書き）

主人公の髪型は、常にポニーテールぽいのにしている。

本気になると、髪をおろす、なので余り見ることができない。

## アスピオ

レイ「ここが、アスピオ」

カロル「薄暗くてジメジメして……おまけに肌寒いところだね。」

エステル「街が洞窟の中にあるせいですね」

ユーリ「太陽見れねえと心までねじくれんのかね、魔核盗むとか」

レイ「……まあ、とりあえず中に入ろう。」

進んで行くと入口の前に騎士が一人立っていた。

「通行許可証の提示を願います」

エステル「許可証……ですか……？」

エステルが若干困った様に言うともう一人の騎士が

「ここは帝国直属の施設だ。一般人を簡単に入れられるわけにはいかない」

カロル「そんなの持つてんの？」

カロルが皆に聞いた。

レイ「多分、持っていないんじゃない。」

俺がカロルに答えると、コーリが騎士達と話してた。

「コーリ、中に知り合いがいるだけ、通してもらえない？」

「正規の訪問手続きをしたなら、許可証が渡っているはずだ。その知り合いとやらからな」

コーリ「いや、何も聞いてないんだけど、入れないってなら、呼んでもらへんないかな？」

「その知り合いの名は？」

「コーリ「モルティオ」

コーリが名前を言つと騎士達が驚いて、怯えた声で答えた。

「モ、モルティオだと！？」

「や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してめられえ」

カロル「ちえ、融通きかないんだから」

カロルの言葉に騎士が怒り武器に手をかけようと、していたら カロルはすぐにコーリの後ろに隠れた。

エステル「あの、フレンとこつ名の騎士が、訪ねて来ませんでしたか？」

エステルは自分の目的を騎士に聞いていた。

「施設に関する一切は機密事項です。些細なことでも教えられません」

エステル「フレンが来た目的も？」

「もちろんです。」

レイ「つてことは、フレンがここに来たってことだな。良かったな、エステル」

エステル「はい。」

騎士は慌てて

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

エステル「じゃあ、せめて伝言だけでもお願ひできませんか？」

ユーリ「やめとけ、ここつらに何言つても時間の無駄だつて」

ユーリはそう言つと違う所に歩いて行つた。それに続く様に俺達も歩いて行つた。

カロル「諦めちゃつていいの？」

ユーリ「冷静にいこいぜ」

エステル「でも、中にはフレンが……」

エステル「絶対に諦めません！今度こそフレンに会つんです」

ユーリ「オレはモルティオのやつから、魔導器取り返して、ついでにぶん殴つてやる」

レイ「じゃあ、他の出入口を探すか」

ユーリ「それ、採用。ぐるっと回つてみよつぜ、ござとなれば、壁を越えてやりやあい」

=====

ガチャ ガチャ

ユーリ「都合よく開いちゃいないか」

今、裏口を見つけてユーリが扉を開けようとしたところだが、カギがかかっていた。

エステル「壁を越えて、中から開けるしかないですね」

ユーリ「早くも最終手段かよ……」

ユーリとエステルが話している時に俺とカロルは……

レイ「カロル開けるか？」

カロル「多分、大丈夫だと思つよ。」

ガチャ ガチャ、ガチャ ガチ

カロルにカギを開けてもらつていると、エステルがこちらに気づいた。

エステル「カロル、何をしてるをです？」

カロル「よし、開いたよ」

エステル「え？ だ、ダメです！ そんなドロボウみたいな」と…」

ユーリ「……おまえのいるギルドって、魔物狩るのが仕事だよな？ 盗賊ギルドも兼ねてんのかよ」

カロル「え、あ、うん……。まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやれるのは」

カロルは焦りながら答えた。

レイ「『苦労さん、じゃあ行こうか』

俺とユーリは扉から中に入ろうとしたら

エステル「ほんとに、ダメですって！ フレンを待ちましょっ」

ユーリ「フレンが出てくる偶然に期待できるほど、オレ、我慢強くないんだよ。だいたい、こうこうときには法とか規則に縛られるのが嫌でオレ、騎士団辞めたんだし」

エステル「え、でも……」

レイ「じゃあ、エステルはここで見張りだな」

エステル「え、えっと、でも、あの…………っ！！わ、わたしも行きますっ」

キイ

中に入った。

ユーリ「なんかモルディオみたいなのがいっぱいいるな……」

するとエステルが近くにいた男の人と話しかけた。

エステル「あの、少しお時間よろしいですか？」

「ん、なんだよ？」

エステル「フレン・シーフォという騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ああ、あれか、遺跡荒しを捕まえるとか言ってた……」

エステル「今、どこに！？」

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

エステル「そ、ですか。…………ごめんなさい」

エステルは少しがつかり様に言った

「じゃあ、失礼するよ」

去ろうとしていたが、ユーリに止められた

ユーリ「ちょ、待つた。もうひとつ教えてくれ、ここにモルディオ  
つて天才魔導士がいるよな？」

男は驚いて

「な！あの変人に客！？」

ユーリ「さすが有名人、知つてんだ」

「……あ、いや、何も知らない俺はあんなのとは関係ない……」

男は逃げようとしたがユーリに捕まつた。

ユーリ「まだ話は全然終つてないって」

「もう！なをだよ！」

ユーリ「どこにいんの？」

「奥の小屋にひとりで住んでるから、勝手に行けばいいだろ！」

ユーリ「サンキュー」

カロル「大丈夫なの？」

ユーリ「ん？」

カロル「名前出しただけで、みんな嫌がるなんておかしいよ」

エステル「気になりますね」

ユーリ「そりや、魔導器ドロボウだしな。嫌われてんのも当然だろ」「あいつは、絶対にドロボウなんてしないと、思うんだけど……」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

エステル「絶対、入るな、モルディオ」

ユーリ「いじか……」

ガチャ、ガチャ ノン、ノン

ユーリは最初に扉を開けようとしてカギがかかっていたから、ノックをした。普通逆だろ……

エステル「普通はノックが先ですよ……」

あつ言つてくれた。

カロル「いないみたいだね、どうする?」

ユーリ「悪党の巣に乗り込むのに遠慮なんていらないって

エステル「だ、だめです。これ以上罪を重ねないでください」

カロル「なら、ボクの出番だね」  
いやいやいや、エステルの話し聞いてないし、

エステル「え……？ 出番って……」

力チャヤ、力チャヤ、力チャヤ、  
カロルはカギを開けようとしていた。

エステル「それもダメですって！」

カロル「ま、ちょろいもんだね」

ユーリはカギが開いたので小屋に入ろうとしていた。

カロル「待つて！ ボクも行くよ！」

エステル「あ、待つてください！ もう、どうしてこう……」

レイ「あつ、俺外で待ってるから」

キイ

ユーリ達は中に入つて行つた。

それにしても、待っているだけって退屈なもんなのね、何か面白い事でも起きないかなー？

ド、ゴーン

ん？中から爆発した音が聞こえた。あつ、カロルがリタに攻撃されるんだつた、でも俺が中入ると俺も攻撃されるかもしないし、……てか絶対に攻撃される！

？「なつなななな、何でレイがここに居るのよー？」

ユーリ達とリタがいつの間にかいた。

レイ「お、おう、ひ、久しふりだな。リタ」

チツ、隠れようとしてたのに気づくの遅かった。

リタ「何が久しふりよーーあんた何も言わずに突然居なくなるし、……覚悟はできてるんでしううね。」

レイ「何も言わずに、一様手紙書いてたじやん。」

リタ「うるせーい」

リタは俺に向かつて、ファイアボールを撃つてきた。  
だが、攻撃されるのは、わかつていたから簡単に回避した。

レイ「ちよ、危ないだろ。てか、どつかに行くのか？」

リタは攻撃するのをやめて、少し考えて

リタ「…………ちようじいいレイもついて来て」

レイ「何処にだよ。」

リタ「シャイコス遺跡よ。」

確か盗賊団がいるんだっけか？

レイ「わかつた。お前には世話になつたしな。」

アスピオを出て、シャイコス遺跡に向けて東に向かつた。

シャイコス遺跡  
？（前書き）

遅くなりました。

スミマセン。

## シャイコス遺跡 ？

リタ「ここのがシャイコス遺跡よ」

いかにも遺跡つて所だな

エステル「騎士団の方々、いませんね」

レイ「いや、奥にいるかもしけない、見てみこの足跡」

ユーリ達は足跡を見た

カロル「この足跡、まだ新しいね。数もたくさんあるよ」

ユーリ「騎士団か、盗賊団か、その両方がつてとこだら」

エステル「きっと、フレンの足跡もこの中にあるんでしょう」

ユーリ「かもな」

リタ「ほら、こっち。早く来て」

ユーリは皮肉混じりに

ユーリ「モルティオさんは暗がりに連れ込んで、オレらを始末する  
氣だな」

リタは不気味な笑みを浮かべて

リタ「……始末、ね。その方があたし好みだったかも」

「うわ～～めつちや～」え～～（笑）

カロル「不気味な笑みで同調しないでよ」

エスティル「な、仲良くしまじょうよ」「ん？」

奥に進んで行つた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ユーリ「騎士団も盗賊団もいねえな」

エスティル「もつと奥の方でしょつか？」

ユーリ「奥つていつてもなあ」

辺りを見渡した

カロル「誰がいるよ這裡には見えないよね」

リタは少し考えてから

リタ「まさか、地下の情報が外にもれてんじゃないでしょうね」

エスティル「地下？」

リタ「ここ最近になつて、地下の入り口が発見されたのよ、まだ一

部の魔導士にしか、知りされてないはずなのに……」

ユーリ「それをオレらに教えていいのかよ」

ん？確かにこの石像の下に地下の入り口があつたはず…早速動かすか

リタ「しょうがないでしょ。身の潔白を証明、ギィーギィーするためつて、レイ何やつてんのよ…！」

レイ「何つて動かしてる？」

リタ「何でこいつちに聞いてんのよ…ギィーギィー、話を聞け～」

なつ、いきなり攻撃してきやがつた。近くには、カロルがいる ならやる」とは一つ

レイ「カロルガード」

カロル「え？ ちょっと、なつ、つて、ギャア～～～」

ドッカーン

レイ「ひどいな、お前ないきなり攻撃するなよ、危ないだろ…」

リタ「う、うるわしい」

ユーリ「いや、ひどいのは、お前だろ」

カロル「う～～う、ひどいよ」

エステル「カロル大丈夫ですか？」

ギィーギィー

レイ「ほり、あつた。早く行こう」

リタ「ちょっと向であんたが入り口知つていろのト」

レイ「うーん

少し考えて

レイ「缶

リタ「殺すわよ、しかも字が違つ

レイ「ゴメン。ちょっとこれを動かした形跡があつたから、もしか  
したらつて思つてな。」

リタ「まあいいわ、行くわよ」

地下の中に入つて行つた。

エステル「遺跡のなんて入るのはじめです……」

エステルが進もうとしたら、リタが声をかけた。

リタ「そこ、足元滑るから気をつけて」

するとユーリがリタを見ていた

リタ「なに見てんのよ」

ユーリ「モルディオさんは意外とお優しいなあと思ってね」

リタ「あ……やっぱり面倒を引き連れてきた気がする……レイだけで良かったかも。」

レイ「つつむ、いつもひとりで調査してるじやん。」

エステル「いつもひとりで調査してるんですか？」

リタ「そつよ」

エステル「罠とか魔物とか、危険なんじやありません？」

リタ「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じゃない、その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

エステル「傷つくのがリタ自身でも？」

リタ「そつよ」

エステル「悩むことはないんです？ためらつとか……」

リタ「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だからできるのよ」

エステル「心が贅沢……」

リタ「それに、魔導器はあたしを裏切らないから……。面倒がなくて楽なの」

それを言ひとリタは奥に進んで行つた。

エステル「なんか、リタつて、すいです。あんなにきつぱりと言ひ切れて」

ユーリ「何が大切なのか、それがはつきりしてんだな」

エステル「わたしは、まだその大切がよくわかりません……」

ユーリ「適当に旅して回つてりやあ、そのうち、嫌でも見つかるつて」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

## シャイロス遺跡　？（後書き）

学校が……

今月中に最低でも、もう一回投稿したいと思います。

## シャイコス遺跡？

やつと着いたぜ、いやあ～とても面倒だつた。何がつて？まあとにかく面倒だつたんだ。

今は、魔導器？が居る所に着いたばっかりなんだけど……リタが……

ユーリ「あ、おい！」

リタが魔導器？に近付いた

カロル「うわ、なにこれ？！これも、魔導器？」

ユーリも近付いた

ユーリ「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器がほしいな」

リタ「ちょっと、不用意に触らないで！」

リタ「この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？、うそ……この子も、魔核がないなんて！」

ユーリ「リタ、お前のお友達がいるぜ」

白いマントを着た怪しいヤツがいた。

リタ「ちよつとーあんた、誰?」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だー」

レイ「だつてよ」

「お前達こそ何者だー!」（は立ち入り禁止だぞー!」

リタは若干呆れた感じに

リタ「はあ? あんた救いようのないバカね、あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

カロル「……無茶苦茶言つなあ」

レイ「でも、実際そうだからね……」

白いマントを着たヤツは、魔導器?に近付いて

「くつ! 邪魔の多い仕事だ。騎士といー、こつらといー!」

魔核を入れた

魔導器?は動きだした。

カロル「うつわーつ、動いた!」

エステル「リタ!」

リタは殴り飛ばされて柱に激突した。

エステル「いま、傷を……!」

エステルは治癒術を使いリタの傷を治した。

リタ「あんた、これって……」「……」

リタはエステルの左腕を掴んだ。

エステル「な、なに!?」

リタ「今の……」

エステル「え、えつ? ただケガを直そようと……」

ヒュッ、ドン

魔導器？がユーリ達に攻撃を仕掛けていた

カロル「ちょっと…サボってないで手伝って…」

リタ「あ…、もうしようがないわね！」

白いマントを着たヤツはその隙に逃げていた。

リタ「あたし、あのバカ追うから…こ…はあんたらに任せた…」

ユーリ「任せたって、行けねえぞ！？」

リタ「…ああ…あのバカのせい…！」

ユーリ「仲良く人形遊びするしかねえな

リタ「速攻ぶつ倒して、あのバカをおうわよー！」

レイ「一撃で倒してやる。ユーリー少しだけ時間作って…」

ユーリ「分かった。いくぞ、オラつ！蒼破…！」

相手に向かつて衝撃波を打ち出した。

しかし、余り効果はなく、すぐさま攻撃を仕掛けて来たが、ユーリは簡単に避けた。

ユーリ「チツ、全く効いてないのは、ちょっとショックだなあ」

レイ「ユーリ下がつて」

ユーリは下がつた

レイ「壊したら、リタに殺されるかもしないから、手加減してやる。

「デモンズランス」

闇の力で生み出した槍を相手の頭上に降らせた。

ド、ゴーン

魔導器?は動きが止まつた。

リタ「あとは動力を完全に絶てば……『メンね……』  
完全に動きが止まつた。ユーリとリパークアーマントを着たヤツの後を追つて行つた。

カロル「リタも早く!」

リタ「わかつてゐわよー。」  
カロルとレイはコーリの後を追つた。

リタ「あんたも早くー！」

リタは立ち止まつて、エステルに向かつて言つていた。

エステル「でも、フレンは……」

レイ「あんな怪しい奴がいるといひに、騎士団はいないだろ。」

エステル「じゃあ、もうフレンは……」

レイ「多分、もうここにはいない、」

リタ「あの子を調べたら自立術式が解析できたのにー。」

カロル「そのためにボクらを戦わせたの？」

レイ「正確には、俺とコーリな

リタ「当たり前でしょ」

カロル「極悪人だよ！」

リタ「ドロボウ探しのついでに手伝つてもらつただけよ」

ユーリ「口づやなく足使えよ！――」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

カロル「あ、いたよ！」

白こマントのヤツは、魔物に囲まれていた。

ラピード「ガウ、」

ユーリ「蒼破ッ」

レイ「ゴーリ真似して、蒼破ヅ

ザシユ、ザシユ、ザシユ

魔物は消滅した。

リタ「魔核盗んで歩くなんてどうしてやるのかしら……」

「ひいいっ！やめてくれー！や、やめて、もう、やめてー！  
俺は頼まれただけだ……。魔導器の魔核をもってくれば、それなり  
の報酬をやるつて」

ゴーリ「お前、帝都でも魔核盗んだよな？」

「帝都？お、俺じゃねえ！」

ゴーリ「お前じゅねえってことは、他に帝都に行つた仲間がいるん  
だな？」

「あ、ああー、テテツキの野郎だ！」

ゴーリ「そこつざじ行つた？」

「今頃、依頼人に金をもらいに行ってるはずだ」

ユーリ「依頼人だと……。ビニのビニつだ?」

「ト、トリム港にいるってだけで、詳しいことは知らねえよ、顔の右に傷のある、隻眼でバカに体格のいい大男だ」

ユーリ「そいつが魔核集めてるってことかよ?」

リタ「ソーサラーリングもビニが盗んだのね

「ぬ、盗んでなんていねえ!仕事の役に立つって依頼人に渡されたんだ!!」

リタ「うそね。コソ泥の親玉なんかに手に入れられるものじゃないわ

「ほ、本当だ!信じてくれよ!」

カロル「なんか話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない?」

ユーリ「カロル先生、冴えてるな。ただのゴソ泥集団でもなさへつだ」

「騎士も魔物もやり過ごして奥まで行つたのに！ついてねえ、ついてねえよつー！」

エステル「騎士？やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！くそーーあの騎士の若造めー！」

リタ「…………うつさー！」

リタは自分の武器で攻撃して、気絶させた

カロル「ちょ、リタ、気絶しちゃつたよ……どうすんの？」

リタ「後で街の警備に頼んで、拾わせるわよ

ユーリ「それじゃあ、アスピオに戻るか

シャイコス遺跡を出てアスピオに向かった。

## シャイコス遺跡？（後書き）

今月最後の投稿かも…

アスペルガーカリ.....（前書き）

遅れてしまません？？？

ちょっとした、用事で今月の投稿は、最後になるかも.....

アスピオそれから……

アスピオに到着！

到着はしたんだけど、エステルが落ち込んでるだよね～あの色男め  
！お姫様に心配させるなよ

エステル「……肝心のフレンはいませんでしたね」

リタ「その騎士、何者なの？」

リタが疑問に思つたのか聞いてきた

エステル「ユーリとレイの友達です」

リタ「ふうん、あんたらの友達ね。それは苦労するわ」

ユーリ「なんだよ？」

リタ「別に。で、何でそいつがこの街にいるの？」

エステル「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して……」

リタの疑問をエステルが答えると思い出した様に

リタ「ああ……あの青臭いのね……あたしのところにも来たわ」

エステル「フレン、元気そりでした？」

リタは適当に

リタ「元気だつたんじやない？」

レイ「疑問を疑問系で返す。さっすがリタ！」

リタ「うつせー！」

騎士の要請なら他の魔導士が動くだらうし、もうハルルに戻つたんじやない？」

エステル「……そんな……」

リタ「で？ 疑いは晴れた？」

エステル「リタは、ドロボウをするような人じやないと思いまか」

ゴーリ「思つだけじや、やつてない証明にはならねえな」

エステル「でも……！」

リタ「いこよ、かばつてくれなくて、けど、本当にやつてないから」

ゴーリ「ま、お前はドロボウよりも研究の方がお似合いだもんな」

エステル「ゴーリは素直じやないんです」

リタ「……変なやつ」

レイ「まさか、ユーリもシンデレーラ?」

もしもしそうだつたら……男がシンデレラって……ないな、うん。

リタ「警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻つて」「ユーリ、って言われても、あのこわいおじさん達が通してくれるかどつか」

ヒューン、パシッ

リタがユーリに向かつて何かを投げて、ユーリがそれをキャッチした。

リタ「そうね、これ持つてつて  
それ見せれば、通せるから」

ユーリ「サンキュー」

リタ「いい? あたしの許可なく街出たら、ひどい目にあわすわよ」

リタは捨て台詞みたいなことを言つて、街の警備の所に行つた。

レイ「さて、そろそろ俺も行くかな」

外に出ようとしたらユーリに声をかけられた

ユーリ「いいのかよ、待たなくて」

レイ「いいんだよ、俺は  
でもお前ら待つてろよ、なにされるか、分からぬからな。」

ユーリ「お前は大丈夫なのかよ?」

レイ「俺?俺は大丈夫だよ。なんたって無敵の盾があるから!」

カロルを見ながら答えた。ユーリとエステルは苦笑いしていた

カロル「ほつ僕は盾じゃないよ!?」

カロルが何か言っているが、気にしない、気にしない

アスピオを出て外に行つた。

アスピオそれから……（後書き）

テイルズの最新作が9月発売ですね。

ねねた~ (福井)

またスキット風に

おまか?

話がズレてる

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒステル「そう言えれば、リタとレイは、何処で知り合つたんですね？」

レイ「あれ? 言つてなかつたけ?」

ユーリ「聞いてねえよ」

レイ「あれれ? ユーリくん、嫉妬ですか?」

ユーリ「何でわうなるんだよーーー!」

レイ「そんなんに嫉妬するなよ、このカラダはユーリのものだ・か・

51

カロル「やつぱり一人つてそんな関係だつたんだ。」

「ユーリ「はあ～…………カロル先生一つ言つておく、レイは男だからな」

レイ「当たり前だろ、他に何に見えるんだよ。全く」

力口ル、ヨーリ、エステル、（逆に、一回見ただけで、男だつて分かる人に会つて見たい。（です。）（よ。））

リタ「…………話がズレてるわよ」



ねむた~ (福島)

またまたスキット風です。

おまけ？

マヂかよ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒステル「そう言えれば、リタとレイは、何処で知り合ったんですね  
か？」

レイ「あれ？ 言つてなかつたけ？」

コーリ「聞いてねえよ

レイ「あれれ～？ コーリくん、しつ「そのパターンはもういいからな！」 チッ……別にそんなにたいしたことないぞ、倒れてた所をリタに助けてもらつただけだよ。」

コーリ「お前はそこら辺の魔物に敗れたりしないだろ？」

レイ「別に魔物に敗けて倒れてたじやなくて、空腹で……ね

リタ「あの時は、驚いたわよ、道の真ん中に人が倒れてたんだか

「方なくよ」  
「素通りしてもよかつたんだけど、見付けてしまったからね。仕

レイ「それでも、助かつたんだよ。サンキューな」

リタ「そんなことより、レイあの子に会つた?」

エスティル「あの子？」

リタ「レイが誘拐してきた子の」によ。」

エステル「ゆ、誘拐したんですか!?」

レイ「はあ～～

魔物に襲われるところを助けたんだよ。そしたら、その子が気絶してて、そのまま置いて帰るのも、あれだから連れて来ただよ。……ってこれってある意味誘拐じゃん！？俺いつの間にか誘拐してたのか……。

リタ「だ・か・ら・あ・の・子・に・会つたのか聞いてるの…！」

レイ「すいません。会いました。はい。」

リタ「やつなの？あの子、あなたを追つて面なくなったのよ。」

レイ「マヂかよ



すいません。遅れました。

ちよつとした事情で投稿出来なくて……

ヨーリ達と別れて今は、ハルルの花を見ていた。

ん？ 確か、エフミードの辺りで誰かによつて、結界魔導器が壊されて迂回しなきゃいけなくなるじゃなかつたけ？ 面倒くせえから壊される前に通るか、

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

レイ「到着つと、まだ壊されてないよな？」

エフミードの丘に着いて結界魔導器が壊れてないか周りを見渡したが壊れてわいなかつた。

レイ「よかつた～まだ壊されてなかつた。」

安堵した様子でエフミードの丘を抜けようと出口の辺りまできたら、後ろが騒がしくなつていて振り向くと、ドラゴン？竜？の上に乗つた人が結界魔導器を壊していた。

レイ「マジか！あぶね～後ちょっとでも遅れていたら、迂回しなきゃいけなくなるところだつた。うん？」

何か目線を感じるから周りを見渡したが誰もいなかつた。疑問に思いもう一度周りを見渡したが、やはり誰もいなかつた。ふと上方を見ると、竜使いがこちらを見ていた。

レイ『そんなん、珍しいかい？俺が？』

？「……！（彼が……）」

呼び掛けたが、少し反応があつたがすぐに元どおりにいなくなつた。

レイ「あ～あ、呼び掛けてみたけど反応はなし、か……べつ別に寂しくなんかないんだからね！！」

つて何で独りソソニテレやつてんだろ……さて、どーすんべ、このまま先に進むか、それともユーリ達を待つか

よし！待とう。先に進んでもフレンに会うだけだし多分。あ～～速くユーリ達来ないかな？…………待てよ、確かにソソソ強い魔物出るんじゃなかつたけ？つってもユーリがいるし心配いらぬいか。まあピンチになつたら助ければいいか、つてことでレッソゴ

！

一方ユーリ達は…

一方その頃ユーリ達はリタの家にいて、カロル、ユーリ、ラピードは横にならうつろいでいて、エステルは落ち着かない様子で同じ所を行ったり来たりしていた。

ユーリ「フレンが気になるなら黙つて出ていくか?」

落ち着きがないエステルに向かってユーリが声をかけた。

エステル「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶をしないと……」

ユーリ「なら、落ち着けて」

カロルはくつろいでるユーリに向かってこのあとの事を聞いた

カロル「ユーリはこのあと、どうするの?」

ユーリ「魔核ドロボウの黒幕のところに行つてみつかな、デデッキつてやつも同じどこ行つたみたいだし」

カロル「だつたら、ノール港まで一直線だね！」

ユーリ「トリム港つて言つてなかつたか？」

それを聞いたカロルは少しバカにしたように

カロル「ユーリ、知らないんだ」

ユーリ「知らないって何を？」

カロル「ノールとトリムは、ふたつの大陸にまたがつた、ひとつ  
の街なんだよ。このイリキア大陸にあるのが港の街カプワ・ノール。  
通称ノール港。

お隣のトルビキア大陸には、港の街カプワ・トリム。通称トリム港  
つてね。だから、まずはノール港なの。途中、エフミドの丘がある  
けど、西にむかえばすぐだから」

カロルの説明を聞いたエステルが

エステル「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

ユーリ「…………じゃ、オレも一旦、ハルルの街へ戻るかな」

ユーリの発言にカロルは、慌てて

カロル「え？ 何で？ そんな悠長なこと言つてたら、ドロボウが逃げちゃうよー」

ユーリ「慌てる必要ねえって。あの男の口ぶりからして、港は黒幕の拠点っぽいし、それに、西行くなら、ハルルの街は通り道だ」

カロル「えー、でもお……」

ユーリ「急ぐ用事でもあんのか？ 好きな子が不治の病氣で、早く戻らないと危ないとか？」

カロルは、ボソッと

カロル「そんなはかない子なら、どんなに……」

扉が開いてリタが入ってきてゴーリ達を見て

リタ「待つところとは言つたけど…………どうだけぐつぐつでんのよ。」

エステル「あつ、お帰りなさい。ドロボウの方はどうなりました？」

リタ「ああ、今いる、牛屋の中で、ひ~ひ~泣いてんじやない?」

ゴーリは立ち上がり、リタに向かって

ゴーリ「疑つて悪かつた」

リタ「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こっちも収穫あつたから」

喋りながら、奥に歩いて貼つてある（……）を見た後エステルを見た

エステル「リタ？」

ユーリ「んじゃ、世話かけたな」

リタ「なに？ もう行くの？ ……つて1人足りないけど」

ユーリ「長居してもなんだし、急ぎの用もあるんだよ。レイは知らねえけど」

リタ「あいつ…」

エスティルは一礼した

エスティル「リタ、会えてよかったです。急ぎますのでこれで失礼します。お礼はまた後日」

リタ「……わかったわ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ユーリ「見送りなら」でいいぜ」

ユーリが見送りにきた、リタに向かつて言った

リタ「そうじやないわ。あたしも一緒に行く」

カロル「え、な、なに言つてんの？」

ユーリ「まさか、勝手に帰るなつて」ことか？」

リタ「うん。」

カロル「うんつて、そんな簡単に！」

カロルはツツ「ミミをいた。

ユーリ「いいのかよ？おまえ、ここは魔導士なんだらう？」

ユーリの言葉にリタは少し考える様に悩んでいた。

リタ「…………んん…………！ そつだ、ハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れたままじゃまずいでしょ」

リタが適当な理由を見つけて言つたが、カロルに

カロル「それなら、ボクたちで直したよ」

リタ「はあ？ 直したってあんたらが？ 素人がどうやつて？」

カロル「よみがえらせたんだよ、エステ……」

ユーリ「素人も、侮れないもんだぜ」

カロルが答えるとしたら、途中でユーリが被せて答えた。それを見たリタはニヤツと笑い

リタ「ふうん、ますます心配。本当に直ってるか、確かめないと」

ユーリは呆れた様に

ユーリ「じゃ、勝手にしてくれ」

するとエステルがリタに近付いた。

リタ「な、なに！？」

エステル「わたし、 同年代の友達、はじめてなんです！」

リタ「あ、あんた、友達つて……」

エステル「よろしくお願ひします」

リタ「え、ええ……」

ユーリはそれを（……）横目で見ていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4653r/>

---

転生 ヴェスペリア

2011年11月17日21時40分発行